

「男、突っ走る！」

第65回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (22)

『オフィスツリーイン』代表

眞榮田 浩平 (22)

元名古屋芸術専門学校学生

福沢 瑞枝 (22)

元名古屋芸術専門学校学生

長井 夏美 (22)

元名古屋芸術専門学校学生

大久保 正樹 (26)

元名古屋芸術専門学校学生

植野 雪奈 (22)

元名古屋芸術専門学校学生

船倉 篤志 (22)

元名古屋芸術専門学校学生

奥村 裕司 (23)

元名古屋芸術専門学校学生

鈴木 貴広 (46)

名古屋芸術専門学校講師

國村 英作 (51)

まちづくり会社社長

伊藤 理沙 (32)

若手起業家

大島 幸次 (51)

広告制作会社社長

橋崎 悟 (47)

WEB会社社長

佐代子 (57)

市民映画プロデューサー

鈴木 良江 (68)

広告制作会社営業担当

1 商店街（夜）

交通規制がかかっており、各店舗前には露店やテントなどの出店が並んでおり、準備に追われている——大島が、各所を回りながら挨拶をしている。

2 『スタイル・タウン』・事務所裏表（夜）

テント張りをしている雅也——と、フルーツ缶の入った段ボール箱を運ぼうとすると、冊子の束を積んだ台車を男性が運んでくる。

男性「すいません」

雅也「はい？」

男性「國村さん、いますか？ 翔文堂印刷の者ですが」

雅也「少々お待ちください。（と奥に向かって）國村さんッ、國村さん」

と、奥から國村が出てくる。

雅也「印刷屋の方がいらっしやいました」

國村「（男性を見て）ああ、ご苦労様」

男性「ご注文の品、お届けに来ました」

國村「ご苦労様、ありがとね」

男性「大島さんが、納品先のこと特に言っ  
なかつたから、直接ここに持ってこようか  
と思つて」

雅也「そういえば、大島さん今日どうしたん  
ですか？」

男性「あの日は、祭りの協賛会の委員長だか  
らね。いろいろ回つてるんでしょ、明日か  
ら怒涛の三日間が始まるんだから。じゃ、  
僕はこれで（と出ていく）」

國村「ありがとね」

雅也「開けますか？ あ、でも伊藤さん来る  
の待ちましようか？ 買い出しから、そろ  
そろ戻つてくると思いますし」

國村「そうだね。理沙ちゃんが戻ってきたら  
開けようか」

雅也「はい」

國村「ちよつと休憩しよう。一日準備で、木  
内君も疲れたでしょ」

と、椅子に座る雅也と國村。

N 「毎年八月の第一金曜日から日曜日にかけての三日間は、商店街の大きな夏祭りが開催されます。シニア向けフリーペーパー

『ぷれいす』は、この夏祭りで創刊準備号を発行することになり、何とか僕は座談会原稿を二日間で仕上げ、また他のページのデザインや原稿や写真データも揃い、印刷会社への入稿も終え、ようやく完成をしました。この三日間で、僕らはフルーツ缶を売りながら、フリーペーパーのPRをするこ  
とになったのです」

と、伊藤が買い物袋を持って入ってくる。

伊藤 「戻りました。氷、とりあえずたくさん買ってきました」

雅也 「ありがとうございます」

國村 「理沙ちゃん、とうとう創刊準備号できあがったよ」

雅也 「さっき、印刷屋の方が配達に来てくだ

さったんです。伊藤さんが戻ってきたら、  
開けようって、ちょうど今國村さんと話し  
てて」

伊藤「ついにできたんですね。開けましょ  
うか」

雅也「國村さん、開けてください」

國村「え、僕？」

雅也「発行責任者ですから」

國村「じゃあ、遠慮なく」

と、封を開ける――シニアの人や、國  
村、伊藤が映っている表紙と共に『ぶ  
れいす』のロゴが載っている冊子がで  
きあがっている。

國村「いやあ、とうとうできたね」

雅也「（冊子を見ながら）良かった、座談会  
のページも、素敵なデザインに仕上がって  
る」

國村「大変だったね、二日間であれだけの座  
談会仕上げて」

伊藤「私たち座談会の間ずっと喋ってたのに、

よくここまでまとめたね」

雅也「僕もあの時、座談会の場に同席してたでしょ。参加してる間に、『あ、ここは使おう』とか、『ここはカットしよう』とか、何となくの構成はリアルタイムで考えてたんです」

國村「さすがだね。やっぱり、専属ライターになってくれて良かったよ」

伊藤「本当」

雅也「明日からは、甚平に着替えてフルーツ缶売りまくって、『ぷれいす』もPRしますよ」

國村「気合入ってるじゃん」

雅也「そりゃ自分が巻頭特集を担当させていただけいたフリーペーパーですよ。力も入りますよ」

伊藤「残りの準備しますか」

國村「そうだね」

雅也「はい」

と、テントの下まで来て、フルーツ缶

やフリーペーパーの準備を始める。

3 東京・原宿・カフェ（翌日）

瑞枝が待っている——ドアが開き、夏美が入ってくる。

瑞枝「（手を振って）なつ姐さん、こっち」

夏美「（席まで来て）久しぶり、みずちゃん」

瑞枝「なつ姐さん、しばらく見ないうちに綺麗になった。さすが表参道で働いてるだけ

あるわ」

夏美「そんなことないよ。みずちゃんだって、

綺麗じゃん」

瑞枝「なつ姐さんに言われるなんて、光栄だわ」

夏美「ごめんね、この間行けなくて。みんな元気そうだった？」

瑞枝「うん。うちーが、ちょうど仕事でここに来てたから、それで集まるうってことになってね。まあ、来週あっちに帰るときも、眞榮田や大久保と会おうって話にな

ってるんだけど」

夏美「そっか。私も本当は帰りたいたいんだけど、ちよつと仕事の納期の関係で、帰れそうにないんだよね」

瑞枝「そうなんだ」

夏美「今日は何とか休みが取れたから、せっかくだしみずちゃんに久しぶりに会おうと思つてね」

瑞枝「やっぱり、仕事が忙しくなると、みんな揃って集まるのは難しいね。学校にいた頃は、四階の廊下に行けば誰かしらいて、自然とみんな集まってたのにね」

夏美「そうだね……」

瑞枝「今日は、ゆっくりできるの？」

夏美「うん。あ、せっかく原宿来たし、クレープでも食べようか」

瑞枝「（笑顔で）食べたいッ」

夏美「あれ、そういえば今日から、夏祭り始まるんじゃないかな。私、当時から行ってたんだよ、隣町だったから」

瑞枝「ああ、あの商店街のお祭りでしょ。私も前に行ったことある」

夏美「うっちーがSNSで、フルーツ缶売るからって宣伝してるの見たわ」

瑞枝「うっちーが？」

夏美「何でも、シニア向けのフリーペーパーのライターをやって、その創刊準備号をPRするんだって」

瑞枝「へえ。うっちーもいろいろ頑張ってるんだ」

夏美「あっち戻ったら、うっちーにもよろしく言っといてね」

瑞枝「うん」

#### 4 商店街

夏祭りが開催され、家族連れや学生、子ども、カップルなど、老若男女様々な来場客で溢れている。

#### 5 『スタイル・タウン』・事務所

フルーツ缶を売っている甚平を着ている雅也、國村、伊藤、橋崎。

伊藤「『ぷれいす』創刊準備号です、応援よろしく願います」

雅也「（声を張るように）はい、冷えたフルーツ缶ですよ、いかがですかッ」

橋崎「木内君、声出るねえ」

雅也「こういうの、つい力入っちゃうんですよ」

國村「はい、いらっしゃいませ。フルーツ缶はどうですか？」

と、国枝がやってくる。

国枝「こんにちは」

國村「どうも、国枝さん」

雅也「いらっしゃいませ」

国枝「あら、木内君甚平着てるんだ」

雅也「夏祭りですからね、これぐらいのことは」

国枝「フリーペーパー、無事に発行できたんですね。おめでとうございます」

伊藤「ありがとうございます。おかげで、まずは創刊準備号が形になりました」

国枝「このあたりは、シニアの方も多いですからね。これからますます、フリーペーパーが活性剤になったら良いですね。私も、力になれることがあれば。あ、せっかくなら何部かいただいて、知り合いのお店や交流センターに持っていきましようか」

國村「いやあ、それはありがたい」

雅也「やっぱり市民映画のプロデューサーとなると、このあたり一体の繋がりもあるんでしょうね」

国枝「大した事ないけどね。ただ、私もこういうフリーペーパーに興味があったから、せっかくなら協力もしたいと思って」

國村「今後とも、願ひします」

国枝「はい」

N「祭りは三日間続き、最終日の夜の片づけの後、事務所でささやかな打ち上げをした時、僕はかすれ声になっていました。それ

からしばらく経つと連休が近づき、僕は久しぶりに専門学校へ遊びに行きました」

## 6 名古屋芸術専門学校・屋上

喫煙スペースで煙草を吸っている鈴木

——傍らに雅也。

鈴木「そっか、フリーペーパーの巻頭記事を書いたのか」

雅也「ええ。まだ創刊準備号で、これから正式な一号目に向けて動いていくんですけど」

鈴木「三年間も、歴史雑誌の編集やってたら、うちーならお手のもんじゃないのか」

雅也「とんでもない。学校でも教わらなかつたこともたくさんあるんですよ。現場でも学ぶことが多くあるんだって、実感してます」

鈴木「楽しそうにやってるなら、良いや。一人でスタートしたから、どうしてるか気になってたんだ」

雅也「先生……」

鈴木「創作活動は、やってるか？」

雅也「いや、今は原稿執筆の仕事のことでいっばいいっぱいで、なかなか前のように脚本を書く時間までは」

鈴木「それはいかんぞ」

雅也「え？」

鈴木「やっぱり、うちーは、あの時みたい  
にいつまでもキラキラした目で創作活動し  
ないと。仕事を理由に、創作活動を怠った  
ら、腕が落ちるぞ」

雅也「……」

鈴木「書きまくってこそ、うちーだろ」

雅也「……はい。これからも書きます」

鈴木「今日の飲み会は、どんなメンツなんだ」

雅也「みずちゃんと、眞榮田と、大久保の四  
人で集まるんです。なつ姐さんは仕事でこ  
っちに帰ってこれないのと、加藤は予定が  
合わなくて、このメンツになりました」

鈴木「やっぱり、うちーは映像専攻のメン  
ツとの親交が一番深いんだな」

雅也「僕、シナリオ専攻なんですけどね。

（と苦笑すると）この学校で一番のホープと呼ばれてる映像専攻のメンツと、卒業後も仲良くさせてもらえてるなんて、ありがたいことですよ」

鈴木「あいつらに、よろしくな」

雅也「はいッ」

## 7 居酒屋（夜）

雅也、浩平、瑞枝、正樹が飲んでいる。

浩平「そっか。うちー脚本の映画が、クラシクインか」

雅也「うん。それで先月千葉に行って、せっかく関東に来たんだからと思って、みずちやんや加藤とも会ったの」

正樹「じゃあ、二人は先月以来ってことか」

瑞枝「そういうことになるね。なつ姐さん、仕事の都合でこっち帰ってこれないから、残念がってた」

雅也「俺も久しぶりに、なつ姐さんに会いた

かったな」

浩平「俺も」

正樹「長井の奴、綺麗になってるんだろ？」

瑞枝「綺麗になってたよ。この間、一緒に原宿行っただけけど、さすがなっ姐さんって感じのオーラでさ」

雅也「元々モデルみたいに綺麗だったなっ姐さんが、あれ以上綺麗になったら相当だよ  
ね」

瑞枝「竹下通り一緒に歩いたけど、横に並ぶのが恐れ多かつたぐらい。何人もなっ姐さん見て振り返ってた」

浩平「今にスカウト来たりして」

正樹「あるかもな」

雅也「（浩平と正樹に）二人は？ やっぱりテレビ局出向だと忙しいんじゃない？」

浩平「俺は平日の昼の情報番組担当で、大久保は夜のバラエティ番組担当なんだけど、まあそれなりに忙しいわな。ディレクターからも、よく怒られてるし」

正樹「それでも、うちの部署はまだまともな  
ほうらしいけど」

雅也「大変そうだね」

浩平「うちーこそ、一人じゃいろんな意味  
で大変だろ」

雅也「まあ、ぼーっと待ってても仕事は来ないしね。自分から仕事を取ってこないといけないし、会計のこととかもね。この間、青色申告の記帳勉強会っていうのに参加したんだけど、難しくて大変だった」

正樹「そういう勉強を、学校にいる間にしてほしかったよな」

浩平「分かる。フリーになったときに、どんなことを準備しなきゃいけないとか」

瑞枝「確かにね。もっと勉強すべきことが、私たちにはあったのかもね」

N「久しぶりのメンバーとの話は尽きず、またアルコールを飲むペースもつい早くなつてしまい、僕はとうとう潰れてしまっていました」

8 木内家・雅也の部屋（一週間後）

雅也が、領収書を整理しながら、パソコンで記帳をしている。

N 「そして、一週間が経ち、お盆も明けてしばらくしたある日のこと……」

雅也のスマホに着信が来る——スマホを見ると、相手は雪奈からである。

雅也 「ゆきちちゃん……？ （と電話に出ると）  
もしもし、ゆきちちゃん？ 元気って、この間お盆の時の飲み会で会ったばかりじゃん。

どうしたの？ 何かあった？ え、プール？ うん、俺は大丈夫だけど。場所は？  
ああ、それなら近くにある駅まで電車でおいでよ。俺、家から車で三十分で着くから、駅まで迎えに行くよ。え、あつぽん、また京都から戻ってくるの？ だってこの間の飲み会で帰ってきたばかりじゃん。すごいな、あつぽんの行動力。うん、分かった。じゃあまた、詳しいことはグループLINE

Eのほうで。はいはい、ありがとね。じゃあ（と電話を切る）」

N「専門学校の同級生だったゆきちゃんから、友達や後輩と一緒にプールに行こうと誘われました」

9 プール（数日後）

流れるプールで遊んでいる雅也、雪奈、篤志、裕司、その他後輩たち。

10 同場所（夜）

ナイトプールとなり、カップルや若いグループばかりが群がっている。  
テントが張られたソファで休憩している雅也、雪奈、篤志、裕司、後輩たち。

雪奈「ナイトプールになると、こんなに客層変わるもんかな？」

篤志「さっきまで家族連れだったのにな」

裕司「パリピとかカップルばっかで、俺たち

「浮いてないかな」

雅也「何か、日焼けサロンでバンバン焼いて  
きましたって人たちばっかだね」

雪奈「絶対みんな、インスタ映え用に写真撮  
ってアップするよ」

篤志「俺たちも撮るか」

雅也「撮るの？」

篤志「いや、撮るっちゃ撮るんだけど、あえ  
てSNSにあげずに、トップ画とかをさり  
げなく変える程度にするんだよ」

裕司「なるほど。インスタ映えの写真を撮る  
のに、あえて載せない手法を徹底するって  
ことだな」

篤志「そういうこと」

雪奈「やってみようか」

× × ×

篤志が指示を出して、様々なポーズを  
取っている雅也——それぞれの角度か  
ら写真を撮る雪奈や裕司たち。

N「中学校以来と思われるプールは、とても

楽しい時間でした。しかも、散々遊び、学  
び、助け合ってきたこの専門学校のメンツ  
となると。この間、祭りで声をガーガーに  
してしまったばかりなのに、結局このプー  
ルの後も、僕の声はダミ声のようになって  
しまいました」

11 『スタイル・タウン』・事務所（数日後）

雅也、國村、伊藤、大島、橋崎、国枝  
が編集会議をしている。

N 「九月に入り、市民映画プロデューサーを  
している国枝さんも編集スタッフとして加  
わった編集部は、創刊号に向けて編集会議  
を重ねていきました。そして、もう一人：  
…」

と、ノック音が聞こえ、ドアの前で女  
性が立っているのが見える。

大島 「お、来たな。（とドアに向かって）よ  
っちゃん、どうぞ」

と、鈴木良江（68）が入ってくる。

鈴川「おはようございます」

一同「おはようございます」

大島「紹介します。うちで営業担当をしてくれている鈴川良江さんです。今回から、スポンサー獲得のための営業担当として、携わっていたりだくことになりました」

鈴川「鈴川です。大島さんとは、タウン誌を作っていた頃からお世話になっており、定年後ゆっくりしていたところ、声をかけていただき、この春から大島さんの会社で世話になっています。営業担当として頑張りたいと思いますので、よろしくお願いします」

一同「よろしく願います」

N「編集部の規模がどんどん大きくなってくと、僕はこの時実感していました」

つづく